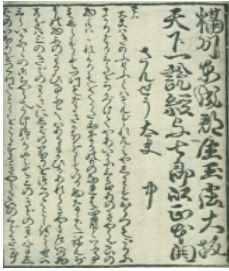


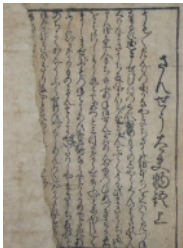




発表タイトル	草子本『さんせう太夫物語』に見る寛文期草子屋の活動
発表者所属名	日本文学研究専攻・国文学研究資料館
発表者氏名	林 真人
発表内容	
<p>草子本『さんせう太夫物語』は、五説経の一つ、「さんせう太夫」の正本を草子化して寛文期(1661 ~ 1673)に刊行された本である。それ故、本としての形式面においても、内容面においても、舞台上の語りを文字化したとされる正本とは異なる性格を持つ。書誌的な相違点としては、正本の多くが中本や半紙本なのに対し、草子本は大本であることなどがあげられる。形式面においては、正本が語りの再現を前提として太夫名や節章を記すのに対し、草子本にはそれがない。本文内容においては、正本に見られた説経特有の語り口が草子本では失われている。このような加工＝草子化は草子屋の主導によって施されたものである。しかし一方で、草子本の本文が正本の本文に拠って作られたものであることは間違いない。草子本本文は「さんせう太夫」諸本中現存最古、寛永期(1624 ~ 1645)刊の与七郎本と極めて近い内容を持つ現存しない正本に拠ったものと考えられる。</p>	
<p>草子本の挿絵は、その内容に本文との矛盾が見られる。草子本の挿絵と構図の共通する挿絵を持つ万治寛文本にも、本文と挿絵の内容に矛盾が生じている。また、草子本では見開きになっている挿絵が万治寛文本では片面に仕立て直されている。これらのことから、草子本の挿絵は草子本とも万治寛文本とも異なる本文を持つ現存しない本を典拠にしていると考えられる。</p>	
<p>草子本は、寛永期説経正本の面影と寛文期の草子屋の活動の一端を同時に垣間見ることのできる本なのである。</p>	
【本文】	【挿絵】
 <p>与七郎本</p>	 <p>非現存本 a</p>  <p>非現存本 b ()</p>
 <p>草子本</p>	<p>草子化</p>  <p>草子本</p>  <p>万治寛文本</p>